

【新装版】

日本植民地文化運動資料 4

満洲讀書新報

全二巻
別冊一

満洲讀書同好会編

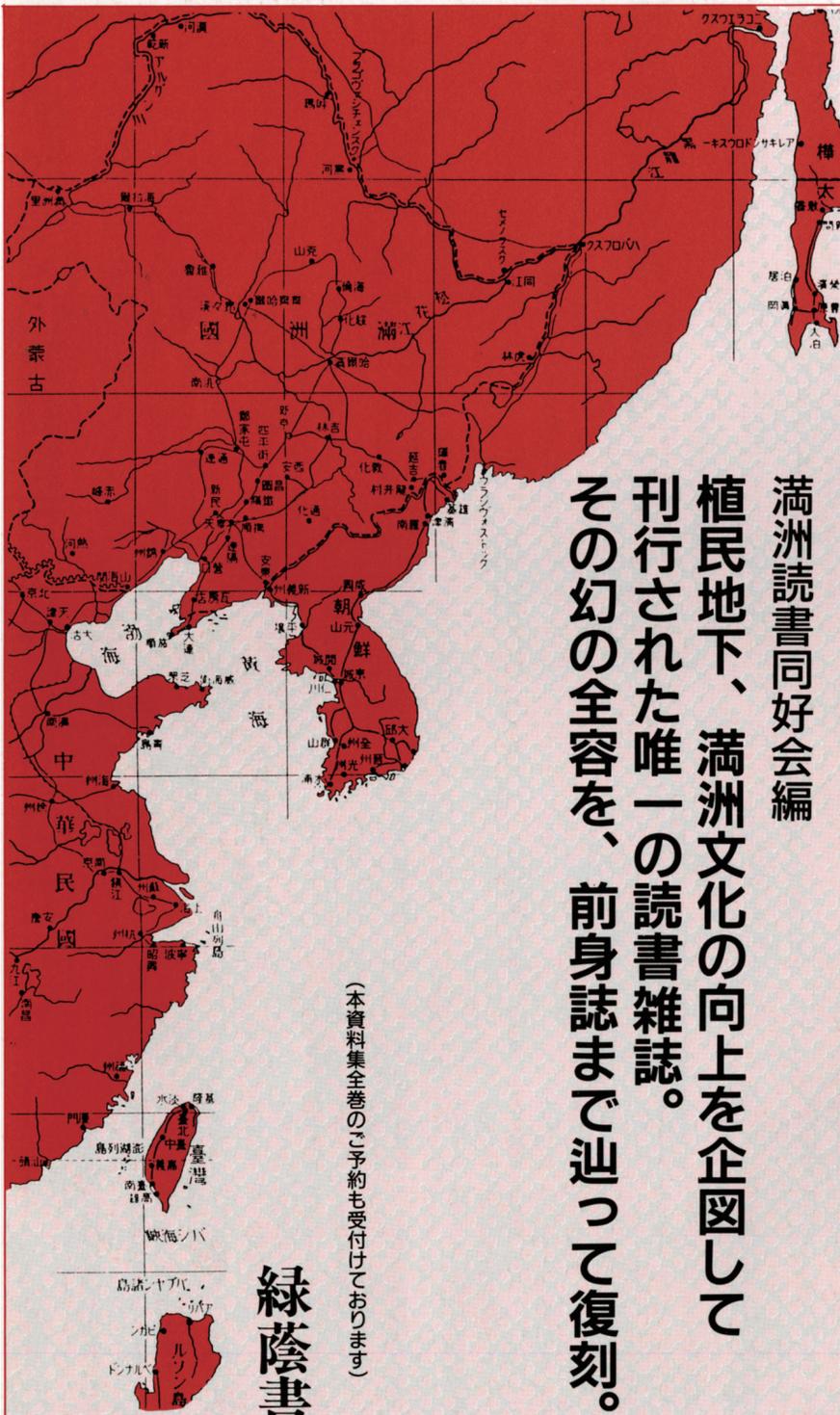
植民地下、満洲文化の向上を企図して

刊行された唯一の讀書雑誌。

その幻の全容を、前身誌まで辿って復刻。

(本資料集全巻のご予約も受付けております)

緑蔭書房



『日本植民地文化運動資料』刊行にあたって

近年、日本植民地の研究は質量とも大きな発展を遂げつつあるが、まだまだ政治・経済的側面への偏重は否めない。より構造的に浮き彫りにするためにも文化史的な視点からの分析が必要である。本資料集の刊行は植民地研究の上で、これまで不十分であった文化運動関係の資料を提供しようとするものである。

本資料集が対象とする地域は、戦前・戦時中、日本が植民地としていた地域及び占領地域である。即ち台湾、朝鮮、満洲、樺太を中心に中国（満洲を除く）、フィリピン、ベトナム、タイ、ビルマ、マレーシア、シンガポール、インドネシアそれに南洋諸島等の所謂「大東亜共栄圏」とほぼ重なる地域を対象とする。

また対象とする分野は官民・民族を問わず広く知的・精神的・思想的運動を含む。例えば新聞・雑誌・放送・映画・図書館等の諸メディアから教育、文芸、言語、都市計画・建築、社会・生活改造等である。

本資料集は、最初に日本植民地地下でどのような集積がなされていたのか、それが最もよくわかる図書館資料を刊行し、随時他の分野の資料も公刊していく予定である。

『満洲讀書新報』復刻にあたって

『満洲讀書新報』は、満洲讀書同好会（一九三八年、大連にて創立。のち関東州讀書協会の月刊機関誌であり、満洲で発行された唯一の讀書雑誌として、特異な存在であった。今回の復刻にあたっては、本誌の前身である『沙河口図書館報』（一九三六年創刊）も合せて収録し、本誌の誕生から終焉まで、その全貌をあたうかぎり明らかにすべく努めた。

本誌は、満鉄ライブラリアン間の情報交換誌であると同時に、満洲における讀書文化の発展に貢献することをみずからの使命とした。その誌面は、満洲の文化人に発言・寄稿の場を広く提供し、満洲の出版界・読書界・図書館界の動向はもとより、随筆、書評、書誌、読書論、古本趣味、図書紹介等きわめて多彩で、一読、興のつきるところがない。

小社ではすでに、『書香』（大連図書館）、『北窓』（哈爾濱図書館）、『收書月報』（奉天図書館）等を復刻してきたが、従来、研究者の間でも知られることの少なかった『満洲讀書新報』の刊行により、右の三大館報の資料的空隙を補充すると共に、植民地文化研究の各個テーマをさらに拡大・深化されるものとして、その価値ははかり知れない。読者の幅広い活用を期待してやまない。

『日本植民地文化運動資料』関係年譜

- 明治39年 南満洲鉄道株式会社創立
- 明治40年 満鉄調査部に図書室設置（後の大連図書館）
- 明治43年 韓国併合
- 大正3年 奉天、長春など八ヶ所に図書閲覧場設置
- 大正4年 第一次世界大戦勃発
- 大正5年 列車文庫設置
- 大正5年 南満洲司書会成立、『南満洲司書会雑誌』創刊
- 大正7年 大連図書館創立
- 大正8年 朝鮮三一運動
- 大正9年 奉天簡易図書館を本社直営とし、奉天図書館に改称
- 大正11年 衛藤利夫、奉天図書館長に就任
- 大正12年 哈爾濱図書館設立
- 大正14年 『書香』創刊
- 大正15年 柿沼介、大連図書館長に就任
- 昭和3年 張作霖爆殺
- 昭和4年 満鉄図書館業務研究会開始
- 昭和6年 『書香』復刊→19年休刊
- 満洲事変
- 昭和7年 前線兵士への陣中文庫開始
- 満洲国建国
- 昭和10年 『全満24図書館共通満洲関係の漢書件名目録』刊行
- 昭和10年 朝鮮総督府図書館『文献報国』創刊→19年廃刊
- 昭和11年 奉天図書館『収書月報』創刊→18年休刊
- 昭和12年 日中戦争始まる（7月）
- 満鉄附属地の行政権を満洲国に移譲
- 『図書館新報』第2次創刊、17号より『満洲読書新報』と改題
- 昭和13年 新制図書館研究会第一回委員会開催
- 昭和14年 大調査部体制となる
- 哈爾濱図書館『北窓』創刊→19年休刊
- 昭和16年 満洲国図書館協会発足
- 昭和17年 満鉄調査部事件
- 昭和20年 日本敗戦

二葉亭四迷の満洲調査

布 村 一 男

「目下滿洲實業案内といふのを版朝に運致致居候、材料はボズドネーエフのオビサリニエオ、マジンジャーと Horst's manchuaria との二冊に過ぎず勉強して筆は執れど材料窮乏の爲め意の如く筆が運ばず頗る困苦してゐる。御願のせつ御地の經濟事情を御見聞の儘御報に預りたし、實業案内は二月程繰繰する筈、これを書き終りたらば小生も或は飛出すも知れず……」

と二葉亭四迷が從軍中の通譯官井田孝平に材料の提供を求めてゐる「滿洲實業案内」を大阪朝日新聞に書き始めたのは旅順も陥落して日露戦争の見透しが略々つき始めた明治三十八年一月十六日であつた。

戦前の哈爾濱行で文學者として露語學者二葉亭四迷より實業家長谷川辰之助として更生し、彼の考へる本然の姿に歸らんとする試みはもろくも失敗に終り、今や新報社に假の筆を置いて再起を待つ彼の心をこめての調査も二月十五日迄の約一ヶ月間に斷續的に十三回に亘つて掲載されたが遂に完結を見るに至らなかつたのである。

「滿洲實業案内」の主なる種本はボズドネーエフの「滿洲誌」であることは前の要約にも書いてある通りだ

率じて調査したといふボズドネーエフの「滿洲誌」に採り傍ら其の他の諸書に及ぶ、所謂源は版に由るといふものでござらぬと露國は我が國の爲に露拂ひしたやうになる。

とあつたやうに白状してゐるのだが我々は彼があの時代によく此の種本を手に入れそして使ひこなしてゐることに敬意を表せざるを得ないのである。

嘗つてこの「滿洲誌」のことを一寸書いたので繰返しになるが一八九七年に刊行された此の本は「滿洲實業案内」に散見する一八九五年の記チャーニンの調査、レシンの旅行記パラバインの吉林省に於ける調査は勿論、一八八四年にロシア地理學會が創立せられて滿洲にも數次の探險隊が派遣せられ、殊に軍部が日露戦争前後の日本の據頭に刺戟せられて滿洲調査に本腰をいれだして以來の多くの人々の調査書、旅行記は全部利用せられたる所の所謂「ロシア滿洲學」の集大成であり、當時の滿洲に關するエンサイクロペヂヤであつた重要な書物である。

これが日露戦争の陣中で移動機體をなし「二葉亭」によつて紹介されてから一年餘後の明治三十九年に「滿洲通誌」として出版されたのだが附

すいせんします(順不同・敬称略)

『滿洲讀書新報』に期待する

矢口進也 (出版ジャーナリスト)

滿洲在住の日本人は大なり小なり滿鉄の恩恵に浴していた。病院や文化ホールが滿鉄の所有だったし、消費組合は値段が安いので社員のバスを借りて市民も利用していた。しかし、大連市内の図書館がほとんど滿鉄の直営だったことを迂闊にも私は知らずにいた。

このたび復刻される『滿洲讀書新報』は大連の沙河口図書館報を母胎にしている。小さなメディアだが資料的価値は大きい。

大連をはじめ滿洲各都市で日本の出版物を買うことはできたが、少し専門的な本となると注文して取り寄せるしかなかった。値段も割高である。このような不自由さが図書館人をして讀書情報誌の発行をうながしたのでないかと思う。滿洲では数は少ないながらも独自の出版物がある。私は滿洲での出版活動にかねてから関心をもっていたが、それを知るための有力な資料を目にする機会がなかった。『滿洲讀書新報』の復刻が何らかの情報をもたらしてくれるものと期待している。

出版史、社会史の重要資料として

紀田順一郎 (評論家)

最近、旧植民地に関する文化面の研究が盛んになっているが、この分野の認識が七〇年代から起こっているにもかかわらず、資料難から十分な展開を見ていないのは周知の通りである。緑蔭書房版『日本植民地文化運動資料』は、この欠を補うものとして意義深い企画であるが、とくに今回刊行される『滿洲讀書新報』は、出版史、社会史を専攻する立場からもたいへん歓迎すべきことのように思われる。

戦前および戦時下の日本植民地における出版物需要の実体がどのようなものであつたか、当時の人々が何をどのような思いで読んだのかということが、この雑誌に掲載されている詳細な統計や資料などで正確に把握することができよう。また、作家などの評論、随想などからは、当時の読書界全般の空気を窺うことができ、それ自身興味尽きないものがある。このような読書雑誌が比較的長期に刊行されたということは、その背景をも考え合わせると重要なテーマを含んでいよう。江湖に推薦したいと思う。

「滿洲」における読書関係メディアの研究に恰好の資料

香内三郎 (東京経済大学教授)

かつて日本帝国主義の植民地だった「滿洲」についての研究が文学、経済史など各方面で盛んになってきつつあるようにみえる。たとえば日本社会文学会は「近代日本と『滿洲』」と題して、中国の研究者を呼び、日中シンポジウムを行うことになっている。そうした動向の象徴としてみなしてよい。

植民地「滿洲」の玄関口であった大連で刊行された『滿洲讀書新報』は、そのための恰好の資料となるであろう。「滿洲」における日本人の表現活動の全体がうかがわれるから



漫畫國めぐり (3)

資料と解説 T・K・生

本質は

異国の橋道が然らしめるのではあらうが、アチラには入浴中にも讀書する勉強家がある。あるらしく、戀愛小説でも勉強になります。お蔭で裁縫家も時々水漉水を返されてメソをとる。だが嘆くまいぞ、その本立派に戀本の間に入る資格が出来た。



女流文壇人素描

森 一 樹

平林たい子の巻

頃日の東京新聞紙は、いづれも平林たい子の重態を傳へてゐる。

『施療院にて』『敷設列車』等の名作を發表して文壇を眩目せしめ、爾後、時代の潮流に凋落の秋を叩つてプロ文學の爲にその孤獨を護り纏めて来た彼女を……とにか、一通りや二通りの意志ではあゝあまではなれないものだ、こゝに信州人特有の粘り強さを見る。

家は信州の貧農、ともかくも高女卒業後、弊利査を頼つて上京したものの、苦闘の生活はそこから始まつた。女給、女中、家政婦、等々、華かなるべき青春なのに痛ましい敗殘の記録のみが堆積して行つた。そして結婚生活。相手はプロの闘士としてよりも、澤色家で知られた山本虎三だから必然的な破綻がそこに待ち受けてゐたのは當然である。

山本との結婚生活は大連で奮まれた。彼等が西通りの裏街に居を構へてゐたのを識つてゐるのは、おそれから私達二三の者ぐらゐではなからうか？

である。彼女はそこで二つのものを生み落した。生理的な分娩と精神的な分娩と……。後者が即ち『施療院にて』の一篇である。女性ならではの描け得ぬ境地、氷の如く冷やかなメスを振つて解剖した殖民地官営病院の一風景、確かに後世に残るであろうところの傑作ではある。『敷設列車』も満洲に取材したものの。

山本との同棲は間もなく解消した。再び上京、今度はプロ評論家で深辯を逞はれた小堀甚二と結婚。彼女はこゝに始めて魂の故郷を得た。一昨年の人戦派攻撃で拘束された後、病氣悪化のため昨年来假釋放となり、現在は世田ヶ谷の至誠病院に入院してゐるが、佐藤後子、神近市子、長谷川時雨、今井郁子の面々が『平林たい子慰問會』なるものを組織して文壇から療養費を募り、彼女を大いに激励してゐるニュースは近頃のない美談である。

藝術的天分に恵まれ、思想的にも圓熟を加へんとする年配、彼女の再起を冀ふ者ひとり私だけではあるまい。

宇野千代の巻

満洲図書館界の様相を伝える貴重な資料

小黒浩司 (土浦短期大学専任講師)

満鉄図書館の歴史をたどる資料は、一九三七年の附属地の「満洲国」移譲以前であれば比較的豊富に残っている。ところがそれ以降の状況を検証し得るものは、意外に少ない。調査部主導の図書館再編が進み、『書香』や『收書月報』からも、図書館の活動を報じる記事は姿を消してしまふ。

『満洲讀書新報』には、この時期の満鉄、あるいは「満洲国」の図書館の動態や、人事に関する記事などが数多く掲載されている。本誌を通読すれば、一九三〇年代後半から一九四〇年代の終末期満洲図書館事情の概略を知ることができる。本誌や『小村侯記念図書館報』は、満鉄図書館の黄金時代を支えた人々の最後の拠り所であった。満鉄の図書館人たちにとって、会社の図書館政策の転換は、不本意なものであり、図書館の現状に対しても批判的であった。彼らの記録は、当時の混迷する満洲図書館界の様相を伝える、貴重な資料なのである。

「満洲」の図書館界や文化情況を知る手がかり

大谷武男 (旧大連図書館司書)

緑蔭書房によって『満洲讀書新報』が復刻されることは、まことに同慶に堪えない。『新報』の特色は満洲の大図書館の館報が、次第に学術誌的要素を強めてゆく中で、あくまでも館報的な性格を持ちつづけ、なお多方面にわたる知名読書人の隨筆を収録していることである。読者は、当時の図書館界の実情を知ると同時に、随想を通して当時の文化状況に接することが出来る。

本誌は、大正十一年に謄写版刷りの『沙河口図書館報』から出発し、再三誌名を変えながら終戦直前にまで及んでいるが、それを貫いているのは、つねに編集・経営の中心にあった勝家清勝の熱意だった。編集所も、彼の最初の任地沙河口図書館から、星ヶ浦水明町の自宅、さらに小村侯記念図書館と終始形影を共にしている。

勝家は信州生まれ、故郷の先達相馬黒光を頼つて上京、学業を終えて大連図書館に就職した。彼の才気は時には敵を作つたが、とにかく企画好きで活動的な図書館人であった。戦後は図書館界から去つて昔の恩人相馬氏ゆかりの中村屋に入り、その経営の中枢にいたというが、昔の同僚で彼を訪ねたという人は聞かない。いまは故人となつたが『新報』の復刻を地下で喜んでゐるに違いない。

すいせんします(順不同・敬称略)

満洲の読書界・出版界をリードした幻の読書雑誌！

本誌の特色と主な内容

出版界・読書界・図書館の動向を伝えた記事

- 奉函通信／哈函通信／連函風景
- 会誌↓会報(会員の消息を伝えたもの)
- 蠹魚のメモ(読書界出版界の主なニュースを摘録)
- 母国訪問旅日記抄
- 蠹魚旅日記抄
- 満洲読書界便り↓満支読書界展望↓大陸読書界便り↓
- 大陸文化新聞↓大東亜文化新聞↓大陸読書文化通信

書評・書誌・文献解題

- 寄贈文献紹介(記事目録等を収録)
- 文献輯覧(新着雑誌等の記事目録を収録)
- 時局資料輯覧(文献の解題)
- 大陸文献(文献の解題)……須知善一
- 書架を背に(新刊良書の紹介)……克江清
- 大陸現地出版

主な連載記事

- 満鉄沙河口図書館沿革史……勝家清勝編
- 海外図書館事情
- 資料室めぐり(満鉄関係諸機関の資料室をルポしたもの)



注目すべき記事

- ・ 図書かん話……高木喬
- ・ 女流文壇人素描……森一樹
- ・ 満洲郷土史関係の書物一二……廣瀬剛太郎
- ・ 北京に於ける文化の一面……國木哲二
- ・ 戦時下に於ける出版と読書傾向……西田孝雄
- ・ 哈爾濱工大図書館に就いて……大野沢緑郎
- ・ 二葉亭四迷の満洲調査……布村一男
- ・ 満鉄異色群像……衛藤利夫
- ・ 旅順にあったナポレオン文庫……上田恭輔
- ・ 美しき満洲作家たち……大森隆夫
- ・ 長白山踏査行……長島宣隆
- ・ 満鉄史関係文献……廣瀬剛太郎
- ・ 柿沼介氏送別特輯
- ・ 衛藤利夫氏送別特輯
- その他
- ・ 納本月報(満洲国内出版物及び関東州内普通出版物)
- ・ 書物探求
- ・ 古書街道

植民地における読書文化の実態を照射する根本資料。
今日にも示唆的で、興味しんしんたる読書記事が満載。

満洲の社会文化史を補完する文献！

日本植民地文化運動資料 4

満洲讀書新報

全二巻 別冊一

▼収録内容

第一巻

- 『沙河□図書館報』 第1号(昭和11年1月)～第4号(昭和11年4月)
- 『図書館新報』(第一次)『沙河□図書館報』改題) 第5号(昭和11年5月)～第8号(昭和11年8月)
- 『図書館新報』(第二次) 第1号(昭和12年4月)～第16号(昭和13年7月)
- 『満洲讀書新報』(『図書館新報』改題) 第17号(昭和13年8月)～第45号(昭和15年12月)

第二巻

- 『満洲讀書新報』 第46号(昭和16年1月)～第87号(昭和20年4月)
- 『巻末付録』『哈爾濱図書館新報』 第1号(昭和6年11月)～第3号(昭和7年3月)

▼刊行概要

全2巻・別冊1(解題) 西原和海・総目次・索引)
 体裁 B5判 / 上製クロス装 / 函入
 頁数 総892頁
 揃定価 41,200円

予約募集 / 8月上旬刊

▼本資料集の定期講読受付中！

日本植民地文化運動資料

戦前の植民地文化を知る手がかりとなる基礎資料の発掘
 植民地満洲の学術・出版の実相を克明に記録、
 昭和激動期の文化状況を伝える総合書評誌！

1 書香

全12巻・別冊1 / 滿鉄大連図書館編
 大正14年4月～昭和19年12月 全10冊
 揃定価144,200円
 本誌の内容は、大連を含め各滿鉄図書館の活動の記録、中国新刊図書案内、滿洲の出版界の動向、北アジア大陸の諸文化・關東軍の動向に關連した情報、本邦書籍の書評、各種の文献目録等多岐にわたる。滿鉄図書館史もとり、滿洲史・中国史・軍閥係史、アジア史研究にとって資料の宝庫。

2 北窓

全5巻・別冊1 / 滿鉄哈爾濱図書館編
 昭和14年5月～昭和19年3月 全26冊
 揃定価82,400円
 滿洲学芸史研究上、重要な意味を持つ本誌は、滿鉄傘下の一図書館報の枠を超え、在滿邦人の知的要求に応えた高級でモダンな総合文化雑誌であった。その内容は歴史・民俗・芸術・教育・出版・書評など、滿洲における文化事業の全般に及び及ぶ。

3 收書月報

全8巻・別冊1 / 滿鉄奉天図書館編
 昭和11年2月～昭和18年9月 全91冊
 揃定価135,600円(6月刊)
 本誌の特色と内容は、何よりも館長衛藤利夫の個性と情熱によって収集された密度の濃い蔵書群を反映している点にある。その密度の濃さはとくに、滿蒙・シベリア等辺境研究図書に表われている。質量ともに充実したこれらの資料を駆使した多数の研究論文や書籍・雑誌解題や紹介は、東北アジア史研究に不可欠。

日本植民地最大の朝鮮總督府図書館報！

5 文獻報國

戦前の大政府立図書館と双壁をなす朝鮮總督府図書館を抜きにして日本近代図書館史は語れない。今回その空白を埋める基本資料を全巻復刻。
 全12巻・別冊1 / 朝鮮總督府図書館編
 昭和10年10月～昭和19年12月 全102冊
 揃定価247,200円

●本資料集は今後も継続して刊行します。

(1993.7)

緑蔭書房

東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03(3579)5444 (定価は税込みです)

●お取り扱い